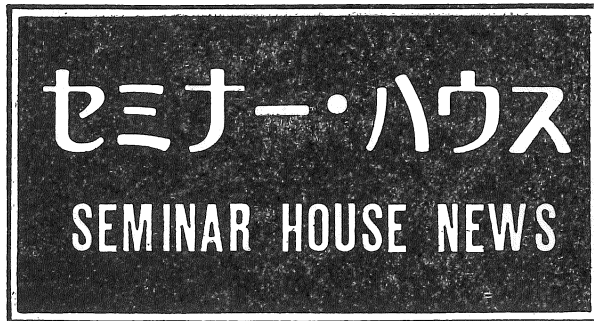


第84号

昭和58年 3月25日

内容

人間の攻撃性を考える…………… 1
 第121回大学共同セミナー…………… 2
 人間性の問題と社会科学…………… 3
 映画に見る暴力…………… 4
 第120回大学共同セミナー…………… 5
 法人ニュース…………… 7
 千人会、寄付金報告…………… 7
 事業部だより…………… 8~9
 わたしたちの合宿…………… 9
 利用状況…………… 9



発行
 財団法人 大学セミナー・ハウス
 <所在地>
 東京都八王子市下柚木(☎192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 5-74590番
 編集
 大学セミナー・ハウス
 企画室
 編集人 中川秀恭
 発行人 吉川孔敏
 製作 中央公論事業出版

人間の攻撃性を考える…………… 1
 第121回大学共同セミナー…………… 2
 人間性の問題と社会科学…………… 3
 映画に見る暴力…………… 4
 第120回大学共同セミナー…………… 5
 法人ニュース…………… 7
 千人会、寄付金報告…………… 7
 事業部だより…………… 8~9
 わたしたちの合宿…………… 9
 利用状況…………… 9

「なぜ今、攻撃性か」と今様に問うならば、現在、われわれの身近に起きている校内暴力や家庭内暴力の問題、人間の存亡にかかわる戦争などが念頭に浮かぶ。「人間の攻撃性」について考えることは、この問題に対する手がかりとなるだろう。

動物界に見られる殺しを含む様々な暴力を仮に攻撃的行動と規定するならば、三つの型が区別される。(1)異なる種の動物の個体間で、(2)同種の動物の個体間で、(3)同種の動物の集団間で起こる攻撃である。その動機は、捕食・反捕食をはじめ縄張り争い、恐怖など様々だが、攻撃的行動は決して単一の現象ではない。差し当り、ここでは攻撃性 (aggression) を、攻撃的行動に共通する性質を仮定し概念化したもの、と考えておきたい。

人間の攻撃性について広く世の中に流布している考え方は、フロイドやローレンツ、アードリーアの攻撃生得論者 (innate aggressionists) に代表され、その主張は次の三つの命題に整理できる。(1)「人間の攻撃性あるいは暴力的傾向は、他の動物同様に遺伝的であり、本能の一部である」、(2)「人類は種内で殺し合いをする唯一の動物である」、(3)「現代の戦争は人類の暴力的本性の当然の帰結であるから、防止することはできない」。

なぜ、この攻撃生得論が世の中にもはやされるのだろうか。まず単純でわかりやすいこと、権威あるノーベル賞学者が言っていること、があげられる。とくに若者には「偽善よりは暴力」といった

暴力の美学があるように思われるし、本能だといえれば社会に対して責任をとらずにすむ、ということもある。またとくに西洋ではキリスト教の原罪思想が根強く、性悪説の発想があることや、フロイドやダーウイングの影響による社会ダーウィニズムがもてはやされることもある。

私は、アンユリー・モンタギューらの自然人類学の立場で、これらの命題を検討していきたい。

まず命題1は、人類学が存在理由にかかわる大きな問題だ。動物にはそれぞれ独自の進化の歴史が

あるのに、生物の中でなぜ人類だけを特別視するのか。その批判に対して人類学者は次のように反論する。人類の進化は、文化依存性の進化とか、文化的適応による自己の家畜化といわれるように、文化の果たした役割が極めて強いという特殊性がある、と。

この命題はローレンツの動物行動学からの類推と、動物の脳の刺激実験から導き出されているが、人間の脳は脳幹脊髄系、大脳辺縁系、新皮質の三重構造になっている。生命維持の基本的部分は脳幹脊髄系で、一般に動物の三大本能

「なぜ今、攻撃性か」と今様に問うならば、現在、われわれの身近に起きている校内暴力や家庭内暴力の問題、人間の存亡にかかわる戦争などが念頭に浮かぶ。「人間の攻撃性」について考えることは、この問題に対する手がかりとなるだろう。

動物界に見られる殺しを含む様々な暴力を仮に攻撃的行動と規定するならば、三つの型が区別される。(1)異なる種の動物の個体間で、(2)同種の動物の個体間で、(3)同種の動物の集団間で起こる攻撃である。その動機は、捕食・反捕食をはじめ縄張り争い、恐怖など様々だが、攻撃的行動は決して単一の現象ではない。差し当り、ここでは攻撃性 (aggression) を、攻撃的行動に共通する性質を仮定し概念化したもの、と考えておきたい。

人間の攻撃性について広く世の中に流布している考え方は、フロイドやローレンツ、アードリーアの攻撃生得論者 (innate aggressionists) に代表され、その主張は次の三つの命題に整理できる。(1)「人間の攻撃性あるいは暴力的傾向は、他の動物同様に遺伝的であり、本能の一部である」、(2)「人類は種内で殺し合いをする唯一の動物である」、(3)「現代の戦争は人類の暴力的本性の当然の帰結であるから、防止することはできない」。

なぜ、この攻撃生得論が世の中にもはやされるのだろうか。まず単純でわかりやすいこと、権威あるノーベル賞学者が言っていること、があげられる。とくに若者には「偽善よりは暴力」といった

（食欲・性欲・集団欲）や情動（快・不快・怒り・恐れ）は旧（古）皮質とも呼ばれる大脳辺縁系で発現されるが、人類が発達しているのは新皮質で、何十億の細胞があり、哺乳類の中でもとび抜けて多い。重要なことは新皮質の機能である適応行動と創造行動は、細胞があれば自動的に発現するといえるのではなく、幼児の成長過程で細胞間の配線がつくられてゆくことにより発達し、学習が決定的な意味をもっている。さらに、人間の脳は上部構造が下部構造にたえず影響を与えており、本

第121回大学共同セミナー
 全体講義から



人間の攻撃性を考える
 ——ヒトの性は善か悪か——

東京大学教授

尾本恵市

能や情動すらも旧皮質の影響を自動的に受けるのではなく、新皮質による価値判断の影響下にある。次に命題2は、人類は進化の過程で、他の動物がもっている「殺しの抑制機能」を失なった、という考え方で、いくつかの事例をその証拠としている。代表的なものを一、二紹介すると、一つは北京原人の遺跡から女・子供の焼けた骨が出ていることから、食人が行なわれたと考えられている。もう一つは、ジャワのソロ川から底のこわれたソロ人の頭骨が出ていることから、中の脳みそを食べたの

（食欲・性欲・集団欲）や情動（快・不快・怒り・恐れ）は旧（古）皮質とも呼ばれる大脳辺縁系で発現されるが、人類が発達しているのは新皮質で、何十億の細胞があり、哺乳類の中でもとび抜けて多い。重要なことは新皮質の機能である適応行動と創造行動は、細胞があれば自動的に発現するといえるのではなく、幼児の成長過程で細胞間の配線がつくられてゆくことにより発達し、学習が決定的な意味をもっている。さらに、人間の脳は上部構造が下部構造にたえず影響を与えており、本

ではないか、と考えられた。しかし前者の場合は大量の動物の骨に混じって少数の人間の骨が出ているにすぎないし、後者の場合は、風化してはいない頭骨をこぼすことは簡単にできることではなく、川に流されていくうちに自然になつた、と考えるほうが有力になっている。また、「食い人種」とは、人を常食としている人種というべきであって、諸民族に関し組織的な食人風習の証拠があるとは言いがたい。人食い人種は、文明人のつくった幻想にすぎない。

これに対して、「それは言っても、戦争や殺しはどの部族にもある」と反論する人もあるだろう。しかし、人類学者はこの点をはっきりと否定する。エスキモー、ピグミー、ブッシュマン、オーストラリア原住民などの採集狩猟民は集団間抗争を一切しない。かれらは、実際、忙しくて戦争している暇がない。昼間のうちに食糧を確保しなければならず、しかも動物は毎日捕れるとは限らない。また、人口密度が希薄で相互に遭遇するチャンスは極めて少ない。ブッシュマンの場合、一平方キロに〇・二人といわれている。かれらは巧みに縄張りを選んで生活しているのであり、部族間抗争があるという報告は、たいていの場合、現代文明の圧力からそのシワ寄せとして引き起こされている場合である。

では、人類は直立二足歩行から武器を持って殺し合いをしてきたという考え方はどうだろうか。人類がチンパンジーやゴリラとの共通祖先から分かれたのは、約一千（2ページ4段めへつづく）

ではないか、と考えられた。しかし前者の場合は大量の動物の骨に混じって少数の人間の骨が出ているにすぎないし、後者の場合は、風化してはいない頭骨をこぼすことは簡単にできることではなく、川に流されていくうちに自然になつた、と考えるほうが有力になっている。また、「食い人種」とは、人を常食としている人種というべきであって、諸民族に関し組織的な食人風習の証拠があるとは言いがたい。人食い人種は、文明人のつくった幻想にすぎない。

これに対して、「それは言っても、戦争や殺しはどの部族にもある」と反論する人もあるだろう。しかし、人類学者はこの点をはっきりと否定する。エスキモー、ピグミー、ブッシュマン、オーストラリア原住民などの採集狩猟民は集団間抗争を一切しない。かれらは、実際、忙しくて戦争している暇がない。昼間のうちに食糧を確保しなければならず、しかも動物は毎日捕れるとは限らない。また、人口密度が希薄で相互に遭遇するチャンスは極めて少ない。ブッシュマンの場合、一平方キロに〇・二人といわれている。かれらは巧みに縄張りを選んで生活しているのであり、部族間抗争があるという報告は、たいていの場合、現代文明の圧力からそのシワ寄せとして引き起こされている場合である。

では、人類は直立二足歩行から武器を持って殺し合いをしてきたという考え方はどうだろうか。人類がチンパンジーやゴリラとの共通祖先から分かれたのは、約一千（2ページ4段めへつづく）

第121回 大学共同セミナー

主題Ⅱ 人間の攻撃性を考える

——ヒトの性は善か悪か——

期日——昭和58年1月7、8、9日

Ⅰ 全体講義

Ⅰ 人類学から見た攻撃性

東京大学教授 尾本恵市氏

(運営委員)

Ⅱ 人間性の問題と社会科学

Ⅰ ハイネクスの文化的進化論を中心

東京外国語大学教授 小浪 充氏

(運営委員)

Ⅲ ゲスト講演

映画に見る暴力

映画監督 篠田 正浩

Ⅳ セクシオン演習

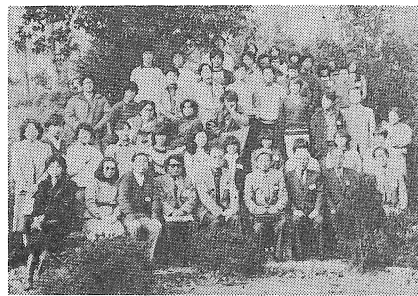
A 動物における攻撃性

東京大学助教授 西田利貞氏

B 攻撃性は制御できる——行動分析の視点から——

慶応義塾大学教授 佐藤方哉氏

C 部族社会の攻撃性とは——健全な部族社会と狂った現代社会——



新春の丘で——指導教授と参加学生たち

D リベラリズムの諸相——アメリカの思想史的展開と人間観——

東京外国語大学教授 小浪 充氏

Ⅱ 参加学生 39名(内女子13名)

筑波大(6)、東大(3)、東京外語大、慶大、専修大、東洋大、早大、成蹊大、明大、産業能率大(各2)、信州大、一橋大、IC

U、日大、亜細亜大、玉川大、東海大、日本女大、学習院大、立大、東京女大、芝浦工大、白梅学園短大(各1)、その他1。合計23校。

◇

人間の存亡にかかわる現代の競争から、校内暴力、家庭内暴力に至るまで、われわれは様々な「暴力」に取りまかれて生きている。人間の攻撃性は、旧約聖書のあのカインとアベルの物語以来、欧米の社会思想の重要なテーマであった。果たしてヒトは、その生物学的本性において殺し屋なのだろうか。

今回のテーマとなった「攻撃性」が、共同セミナー委員会の席上ではじめて話題となったのは、昭和56年7月のことであった。自然人類学の尾本恵市氏が発案者として企画、運営の中心的役割を果たされたが、社会思想史の側面からこのテーマに共鳴された小浪充氏が運営委員に加われ、講師陣には他に、動物行動学、文化人類学、

心理学そして映像芸術の専門家の参画を仰いだ。参加者は、開催時期の関係もあって三九名にとどまったが、かれらの参加意欲は極めて旺盛であった。開講の際に自己紹介をかねて参加の理由が一言ずつのべられたが、かれらの関心の所在は、平和運動とのかかわりの中から人間の攻撃性を考えるようになった、という例をはじめとして、多くが戦争と平和の問題にあり、また自身自身の生き方の中で「攻撃性」を考えていきたい、という切実な願いが感じられた。

人間の攻撃性という、古くてもかもし新しい問題に再検討の光を当てることを意図したこのセミナーは、三日間にわたる諸先生の意欲的なご指導とそれに呼応した参加者により、総合的な人間理解に立って人間存在を問ひ、ひいては現代の学問のありようをも問うものとなった。その意味で共同セミナーの本領が十二分に発揮され、一九八三年の幕開けにふさわしい議論が展開されたことを喜びたい。

プログラムの冒頭の共通セッションで、各セクションの指導教授より問題提起がなされた。その大要は次のようである。

▼西田利貞氏——
攻撃性とは「社会的場面における個体の自己主張の表現」であると定義しておきたい。突然変異と自然淘汰という進化的総合理論からいえば、動物は個体間の競争により、形態ばかりでなく行動においても進化してきた。「なぜ、動物は攻撃するのか」というより、実は「なぜ、動物は仲良くするの

(前ページからつづく)
万年前のことと考えられている。直立二足歩行をしていた猿人が出現したのは三五〇万年前といわれており、最近の発掘によって何種類も存在していたことがわかってきた。その特徴は犬歯が退化していることである。

約一〇〇万年前になると原人が出現する。かれらは完全に人類と違ってよく、脳容量も猿人の倍の一千ccに達しており、それに見合うだけの文化の発展が見られるが、とくに食糧獲得として大型動物の狩猟が行なわれるようになったことは重要である。そして旧人の段階を経て新人となるが、この間は旧石器時代といわれており、大型動物の狩猟を根幹とする採集狩猟経済が営まれた。農耕牧畜が始まり、食糧の生産が行なわれるようになるのは約一万年前のことであるから、旧石器時代から現在までを一〇〇万年としても、われわれの進化の歴史は、その九九パーセントまでが採集狩猟の歴史であるといえよう。われわれの行動様式の中に、もしも遺伝的に規定されている部分があるとすれば、それは採集狩猟に対する適応により獲得されたものと考えべきではないだろうか。

森林から出てサバンナという危険な状況で進化してきた人類が、ライオンなどの捕食者に抵抗するためには、様々な攻撃的行動をとるか」という問いかけのほうの意味をもっている。ただし、個体の生存や繁殖のマイナスとなる過剰な攻撃がなぜ起こるかは、重要な問いかけである。

らねばならなかった。足の速くない人類は道具(武器)を使い戦った。小型動物に対しては逆に捕食者の立場に立った。このように、サバンナにおける捕食・被捕食の関係で発達したものが攻撃性ではないか、と考えられる。

しかし、採集狩猟の生活においては、協調性もまた必要な適応行動だ。食物の分配行動は群を維持するために重要な行為である。もしも、かれらが遠くまで出かけて動物を殺し、その場でその肉を食べてしまったとしたら、キャンプで待っている女・子供らは飢えてしまうだろう。また大型動物の狩猟には必ず集団の協同作業が必要であり、仲間を出し抜こうという気持では動物は捕れないし、それを運搬することも不可能であろう。このように、人類は攻撃性とともに協調性も発達させてきたのであり、その意味では性悪でも性善でもないのである。

命題3には、暴力のエネルギーをスポーツなどで発散すればよいという議論があるが、現実的には、スポーツの盛んな国は攻撃的だ、大国といわれる国ほどスポーツが強い。戦争は、ある価値判断が別の価値判断と相容れない場合に引き起こされるものであり、人類の文明の到来とともに生まれた、と私は考えている。

▼畑中幸子氏——
私はニューギニア高地の部族社会で、8年間のフィールド調査の経験をもっている。かれらは、ベトナム戦争の話の聞き、文明人の破

文責・編集者

(第121回大学共同セミナーの全体講義より)

壊性と残忍性を激しく非難した。かれらは命を非常に大事にするので、敵・味方にかかわらず死者の数で休戦状態に入る。このように、これらの社会では暴力的な戦争は決してエスカレートすることがない。攻撃性の抑制機能を失ったのは文明人のほうであり、このセミナーでまず、未開社会の認識を新たにしたいと思いたい。

採集狩猟民から農耕民になるに

【全体講義(II)要旨】

人間性の問題と社会科学

—ハイエックの文化的進化論を中心に—

東京外国語大学教授 小浪 充



文学と科学の乖離の問題をめぐるイギリスのスノー・ヒルリス論系が示したように、文科系と理科系の学問を、それぞれ独自の方法論と目的をもち、両者は永遠に一つになることはできないと考えられてきた。しかし、ローレンツ批判をはじめとする動物行動学に対する自然科学とハイエックによる社会科学からの批判は、これら二つの文化の融合の可能性を示唆している。

ハイエックが最初にその批判の対象としてとりあげたのが、ビューーの生物学的決定論である。ビューーは大脳生理学が明らかにした生物学的原理に基づいて人間の価値を一元論的に説明したが、ハイエックはこれを「知識の思い上がり」として批判している。彼は現代科学の思い上がりを戒め、合理主義が万能であるかのような錯覚に陥って、無批判に適用されてゆくこと

件で、ニューギニア高地人の集団は大きくなり、暴力行為も増えた。独立を契機として、禁止されたアルコールが流入し、伝統的な社会では起こりえなかった暴力も目立っている。

また部族社会という決まっただけに引き合いに出されるカニバリズム(食人風習)についても、今から半世紀前まで首狩りが行われていたことははっきりしているが、今日まで文明人でカニバリズ

に対して、非常に古くから警鐘を鳴らしていた人である。

ハイエックは自由・平和・正義を三つの大きな否定的価値としてとらえた。たとえば、これが自由であるということを示して、それを人々に強制的に従わせてゆくことは、結果として自由と反対のことになってしまふ。また、平和とは争いのない状態のことであり、もし、特定の平和の目標をたてて、それを実現しようとするならば、平和のために戦うという逆説的状况が起こってしまう。正義も不正の行なわれない状態であって、正義を求めて改革をするとき必ず不正があらわれたりする。これらは、いずれも知的な思い上がりの結果であって、合理主義の陥穽に陥っているとハイエックは考えるのである。

彼は事実の関係を究明して、そこから人間の当為命題をひきだすことは、論理的に立っているとす二元論の立場に立って、人間にとっての文化を強調する。彼にとって、文化の価値は最も重要な価値観の源泉となっている。ビューーの考え方のように、一般に科学、

ムを実際に目撃した者は一人もいない。「あいつは人食いだ」という表現は、かれらの社会では悪口の一つであり、それが文明人の間で人食い人種に変わってしまうのである。

部族社会のリーダーは名実とも風格をそなえている。文明社会ではオスとしての威厳をそなえた男性が少なくなってきた。健全な人間に出会ったことが、これまで文化人類学をやってきたよ

特に生物学の研究では、自然的でないものは人為的、合理的に作られたとする二分法がよく見られるが、それはギリシア論理学に発した誤謬である。文化とは自然でもなければ人為でもなく、それは確かに人間が作ったものではあるが、特定の人間の作為的な設計として捉えることはできない。そこに働いたのは、競争によって次第に整備されてきた行動の規範としての進化の力である。人間には、この行動規範を知覚する能力が本能的に備わっており、社会関係の変化と共に新しい規範が確立してゆくのである。

人間の文化の歴史は非常に古く、そこに働いていた生物学的な進化の力は、遺伝子を通じて人間の生得的な諸価値に影響を与えてきたが、それよりも重要なのは、模倣や言語的伝達を通して適者生存の原理の下に進化した諸々の社会規範である。コミュニケーションの発達に伴い、時には遺伝子よりも早く進化する社会規範に重要な意味を見いだす点に、ハイエックの文化的進化論の特徴がある。(文責・編集者)

▼佐藤方哉氏

心理学の中に占める行動分析は新しい立場の学問である。行動は環境との関係をはなれては理解しえない。〇〇性、といったものを脳の中に探しても見つからない。行動から、〇〇だというレッテルを貼るだけのことだ。そこで私は攻撃性ということばを使わずに、攻撃行動と呼ぶことにする。攻撃行動は社会的な行動であることは間違いないが、いくら自己主張の行動であっても、他個体が何らかの被害をこうむらなければ攻撃行動とはいえない。

人間の行動は、反射行動、本能行動、行為の三つに大別される。反射行動には必ず先行刺激が存在する。その受容は感覚的で、ある器官に限定されている場合が多い。人間の場合、反射行動は生命維持にとって重要であるが、社会的行動の中ではほとんど意味をもたない。本能行動は、反射行動に似ているが、知覚的であり質的である。性行動はその一つであるが、多くの場合、全体的な行動で、起源的には攻撃行動もここに含まれる。

これに対して行為とは、生得的にはそれをひき起こす環境からの刺激がない行動をいう。「手を上げる」ということもその一つだ。この行動の特色は、行動の結果によって頻度が変化することである。すなわち個体の生存や適応にとってプラスのことが起きれば、その行動は起こりやすくなる。人間の社会的行動のほとんどが行為といわれるものである。攻撃行動も本能行動の側面をもっている

が、結果によって変容するという行為としての側面が非常に多い。文化とは、行為が世代を超えて引き継がれていくことである。人間が地球上にこれほど広範囲に生息しているのは、種としての一体性を保ちながら、すなわち体の構造を変えずに行為を環境に適應していくことができたからである。

戦争は個人の攻撃行動のみではとらえ切れない側面をもつ。行動から見た空間には、居住空間(家)、生活空間(職場)、経験空間(行ったことのある空間)、そして知識空間(行っていないが知っている空間)がある。自分のコントロールできる範囲が生活空間までに限定されていた昔と比べ、現代人が知識空間をもっていることは幸福なことだが、知識空間までコントロールできるという文明の発達が、実は戦争をひき起こす基盤となっている。

▼小浪 充氏

アメリカ連邦政府をつくった立役者、ハミルトンとジェファソンの思想的系譜をたどると、前者はホップスに、後者はロックに行きつく。両者は育ちや背後にある文化の面で極めて対照的な人物だが、かれらの人間観に見られる性悪説と性善説からアメリカの歴史を考察したい。

一方、現代社会は、近代化のサイクルの終焉としてとらえられるが、そこに見られる思想的变化に関連して、リベラリズムの問題を考えてみたい。アメリカは民主主義ばかりでなくリベラリズムの実験場でもあった。一八三〇年代に『アメリカの民主主義』を書いたド・トックヴィルの思想に近いハイ

エクを取り上げ、かれの論文「人間的価値の三つの源泉」などに現われた社会進化論、フロイド心理学、ピュエールの大脳生理学などに對する批判を検討してみたい。

四人の指導教授から以上のように入った。便宜上、AとCは合同で行なわれた。

翌二日目は、午前中に尾本、小浪両氏によって、セミナーの二大柱である全体講義I、IIが行なわれた（Iはフロントページ、IIは3ページに要旨を別掲したので参照されたい）。

午後は畑中氏の解説でニューギニア高地人のスライドを中心とした共通セッションIIのあと、テイ・タイムに移り、交友館心づくしの甘酒で小時、歓談した。企画室で用意した新年のお年玉くじも参加者たちには一興であったようである。

つづくゲスト講演は映画監督、篠田正浩氏によって映像芸術からの「暴力論」が語られた（要旨は別掲）。氏が映画界に入るきっかけとなったといふ少年時代の「丹下左膳」との出会いが始まって、レヴィ・ストロースや記号論による映像への切り込み、随所に織り込まれた映画のシーンが、氏の活力にあふれた語り口で展開し聴衆を魅了した。

最終日の全体集會では各セクションのレポーターによる演習の報告が行なわれ、それらをめぐって相互に討論がなされた。以下は主な論点である。



ゲスト講演要旨
映画に見る暴力

映画監督
篠田 正浩

「暴力の影にすぎない。だから、暴力を映像化した場合、もはや暴力ではなく暴力の光と影にすぎない、ということを私は思い知らされた。だから映画のなかにはどんな暴力もない、と断言できる。あるとすればそれは映画のなかで暴力を表現する者の暴力の扱ひ方になかにある。さらに言えば暴力を観念化した映画のなかに暴力の本質が見えてくる。暴力を一種の思想として捉えた映画だけが暴力映画の名に値する。」

「ロシア十月革命の時に少年時代を過ごし、スターリン体制のなかで映画監督になったエイゼンシュテインの処女作『ストライキ』はも

「まず、設定されたAとDのセクションのアプローチに関して、若干意見のくい違いが見られた。すなわち個として人間を見る眼と、集団として人間を見る眼とのギャップが、攻撃性に対する考え方の相違につながっているのではないか、という参加者の一人から

「とも観念的に暴力を扱った映画である。彼は暴力によって革命を行なっている現実を目のあたりにする。工場労働者がストライキをする、それを軍隊が鎮圧する。そこで多くの人が殺される。鎮圧され、殺される人間をいくら映しても歴史をそのまま映像のなかに魅らせることはできない。」

「そこでエイゼンシュテインは何を考えたかという点、殺される人間を映しているカットとカットの間に屠殺場にやってきた屠殺人が牛に向かっているナタを振りおろすシーンを入れる。機銃が放たれて人がバタバタ倒れる。牛の喉頸をバツと切断する屠殺人の腕、次に血を流して倒れる労働者。牛が倒れる。人間が殺される場面と牛が屠殺される場面を映像の中でカット・ワークすることによって人間屠殺場というイメージーションを獲得する。これは映画におけるモントゥアジュ理論として歴史的に重要な出来事であった。」

「私の少年時代は、スターリンとヒットラーが暴力の象徴であったが、日本の天皇も同じように扱ってよいのではないか。暴力装置としての国家がいかにすごいものであるか考えてみたい。」

「『ゴッドファーザー』のおもしろさはわれわれの国家形成のプロ

「出された問題点は、idiotic and nomothetic という学問的方法論にかかわる問題として未消化のまま残された。」

「一方、個と集団における思考のパラレルは、社会科学に新しいパスベクトイヴをもたらす。内側からの衝動と大脳の新皮質を通じ

「セスをそっくりそのままヤクザの抗争のなかで見せてくれるところにある。暴力というものは国家形成の連続と不連続の間を埋めて一つの体制を構成していくさいの重要なフックターになつていく。暴力なしには国家は生まれない。国家があるがゆえに人間は闘争する。『ランボー』は国家と暴力の関係を見事に表現している。グリーン・ベレーに属していたランボー青年が国立公園にやってくる。そこには朝鮮戦争に従軍した経験をもつ公園の保安官がいる。国立公園のなかにランボーは入れてもらえないばかりか、邪険にされ留置所に入れられ、拷問を受ける。ランボーは拷問のなかでベトナム戦争のときの原体験を甦らせる。国家の養成したあらゆる暴力装置を身につけている両者が、つまり朝鮮戦争とベトナム戦争のノウ・ハウの闘いが国立公園を舞台に展開される。かつてアポロであったグリーン・ベレーがいまやディオニソスとして国家と対峙する。現在の国家の暴力装置がかつてのそれと必死に闘う。暴力装置としての国家のもつジレンマが『ランボー』の悲劇性をつくりだしている。」

「エイゼンシュテインは政治における二項対立（ブルジョアと

「た外側からの情報処理という環境モデルをもって、人間は個人個人の文化的価値としていながら、社会もまた同様の価値体系をもっているのではないか、という点が強調された。」

「次に『自由』をめぐる、いくつかの考え方が提起された。一つに

「プロレタリアート」に深い絶望をもつに至る。政治の原型のなかにヘーゲルの弁証法を導入しても、ボリシェヴィキ革命によって新時代をつくらうとしても、そこには凄惨な暴力が残るだけだという絶望感が彼のなかに巣くっていった。彼は国家によつては暴力の終末や平和というものはありえないと考え、共同体の基層のなかに没入していった。」

「日本における暴力の構造は天皇が背負っている神話であるのかどうかは別にして、第二次世界大戦のときに日本民族をあげて戦わせたあの超絶的なもの、最も根源的な暴力であったと思う。そうした呪術的な暴力の構造からわれわれは果たして抜け出しているのだろうか。われわれ現代人はパイオレンスというものの行方がわからなくなっている。何に向かつて暴力を振るうのか、何に對して暴力を振るうことによつて自分のアイデンティティを確保するのか。」

「サイエンスは暴力を吸収する新しい資質になりうるか。ロボットは暴力装置か。ナチスがドクロのバツジを着けていた記憶がわたしの中から消えない以上、あの人類規模での暴力がそんなに簡単にこの地上から消え去るとは思えない。」

「は、集団としての攻撃性を考える上で、集団と集団の関係における自由が重要な問題となる。平和の条件とは、両者の関係において強制のないことではないか。」

「二つには、『自らを家畜化してしまつた人間』の求める自由とは（5ページ五段めへつづく）」

（文責・編集者）

第120回 大学共同セミナー

主題Ⅱ 地球の過去・現在・未来

——太陽と環境と生命——

期日——昭和57年12月17～19日

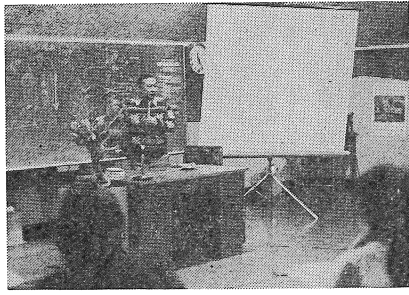
△主題について▽

地球・惑星の誕生と飛翔体観測
—宇宙飛翔体による発見と研究—

電気通信大学教授 芳野越夫氏
△全体講義▽
物質としての遺伝子—生命の歴史と未来—

電気通信大学教授 野田春彦氏
△セクション演習▽
A 過去の太陽活動と人類の歴史
—中世の太陽活動を中心として—

B 現在の大陽活動と地球環境に
ついての研究—オーロラのなぞ
を解く—
神奈川大学教授 櫻井邦朋氏
国立極地研究所助教
福西 浩氏



主題について語る芳野越夫氏 (中央セミナー館)

C 現在および未来の大気—気候
問題に関するひとつの試論—
京都大学助教 廣田 勇氏
D 地球社会の未来と宇宙活動—
スペースコロニー—
宇宙科学研究所教授 大林辰蔵氏
△運営委員▽
芳野越夫氏

△参加学生▽28名(内女子9名)
東大(7)、電通大(3)、筑波大、
早大、帝京大(各2)、東工大、東
外大、英城大、名古屋大、都立
大、学習院大、明学大、青学大、
関東学院大、法大、東邦大、杏林
大(各1)、合計17校

◇ 自然科学分野をテーマにするセ
ミナーは、過去百数十回に及ぶ大
学共同セミナーの歴史を振り返っ
ても、第46回「自然界における対
称性—自然探求へのアプローチ—
」、第75回「生命について」、第
87回「宇宙—現代宇宙の諸問題
—」の都合3回実施されたにすぎ
ない。共同セミナー委員会の席上
で芳野越夫委員はこの点に触れ、
学問分野の枠を越えて、自然科学
の最新の知識を正しく学生に提供
するセミナーの必要性を強調され
た。以来毎年一年、芳野委員を中
心に準備が進められ今回の実現と
なった。12月中旬という期日の悪
さもあり、二八名と参加者は少な
かったが、密度の濃いセミナーが
開催できたことは、芳野委員はじ

め各指導教授の多大な御尽力によ
るものであり、ここに改めて謝意
を表したい。

◇ 文明の発達は地球の規模で自然
を破壊し、人口の爆発的增加をも
たらし、人類の将来に不安を投げ
かけている。人類はこれまでの繁
栄におごることなく、地球と人類
をふくむすべての生命の未来を宇
宙的な基がりの中で最新の科学的
知見に基づいて考えていかなけれ
ばならないだろう。

一日目は、自然科学系セミナー
で、果たして人文・社会科学系の
セミナーに見られるような活発な
討論ができるだろうか、という不
安のなか、開講式に続いて、三時
半から六時まで主題講演と共通セ
ッションが行なわれた。芳野氏は
主題講演の中で、地球の存亡がい
かに太陽活動に支配されている
か、最新の宇宙飛翔体観測の研究
成果を紹介しながら解説を加え
た。また、続く共通セッションで
は各セクションの指導教授が個別
テーマのオリエンテーションをさ
れた。

夕食をはさんで、分子生物学の
第一人者で、昭和56年度まで共同
セミナー委員会の副委員長をつと
められた野田春彦電気通信大学教
授の全体講義「物質としての遺伝
子—生命の歴史と未来—」が深夜
十一時すぎまで、三時間におわり
行なわれた。そもそも生命とは何
か、生命はいつ、どのように発生
し、進化を遂げたのか。分子生物
学、分子進化学の生命観について
の複雑な議論を平易に解説され、
地球上の生物界を統一的に理解す
るための視点を提示された。講義

の後、活発な質疑応答が交わさ
れ、企画当初の不安は消えてい
た。

◇ 二日目は、櫻井、福西、廣田、
大林の四氏による講話と討議が、
午前九時半から午後六時まで昼食
とティー・タイムをはさみ、順次
行なわれた。緊張した講話の合間
に、福西氏のオーロラの16ミリ映
画や芳野氏の星雲のスライドなど
が上映され、自然界の神秘的なま
での美しさは参加者を魅了した。
残念ながら、紙面の関係で四氏す
べての講話を紹介できないが、次
にいくつか紹介しておこう。

櫻井邦朋氏は、中世の太陽活動
を中心に、太陽活動と人類史の関
係について話された。中世初期は
ヨーロッパにとって気候最良期で
あったが、中世末期13世紀末頃か
らは気候が寒冷化し、農作物が大
きな被害をうけ、食糧不足をもた
らし、さらにペストが大流行して
多数の死傷者を出した(「暗黒時
代」といわれる)。このような事
態は、太陽活動を観測することに
よって明らかになる。通常、恒星
は定常状態を保っている星と考え
られているが、たとえば太陽には
大きな周期的変化が見られる。黒
点数と炭素14の生成率の観測によ
って太陽活動の強弱を知ることが
できる。

17世紀初め以来、望遠鏡観測に
よる太陽黒点数の変化のスケッチ
が残されている。それによれば、
17世紀末のほぼ六〇年以上にわた
って黒点がないことがわかる(「マ
ウンダー極小期」)。あの暗黒時代
は太陽活動の衰弱した時期と重な
り合う。

何か。自己の家畜化とは、本来、
生物学的概念として自然淘汰から
自由になってきたことを意味する
が、人類はこれによって自然を操
作する立場に立ち、その見返りと
して「価値」から逃れられない不
自由さをもつことになった。
三つには、このように進化の上
で人類が行なった新しい実験は、
宿命的に危険なしくみを組み込ん
だ。自然の法則性から自由になっ
て価値の相対化が行なわれること
は、戦争する価値をも容認する。
人類の壮大な実験を大失敗に終わ
らせないために、知恵をしぼり、
価値の中にある共通項を模索しな
ければならないだろう。

◇ 閉会に当たり五人の指導教授か
らそれぞれコメントが述べられた
が、次のお二人のことばでこの記
事を締めくくりたいと思う。
「学際研究は、人類社会の存続
をかけるといつてよいほどの意味
をもっていることを、このセミナ
ーで再認識した。これから長い未
来をもつ若い皆さんは、常に学際
的なもの考え方で視角を広げ、
ものごとに対処していつてほし
い」(畑中氏)

「人類は学習によって、攻撃的
にも平和的にもなるという考え方は、
社会に対する個人の責任を考
えることにつながる。これは決し
て楽な考え方ではない。身のすく
むような考え方だが、これから学
問を志そうとする若い人々には、
こうした責任意識をもってほし
い」(尾本氏)

確かに、このような太陽活動と気候変動の間には何か関係があるらしいことはわかっているが、今後の地球上の気候変化を確実に予測できるかといえは、いくつもの難点が残るだろう。

第一には、気候変化には経済の景気変動に匹敵するくらい多くの因子が絡んでおり、第二には、太陽活動の変化のメカニズムが解明されていないこともあり、現時点ではまだ確実な気候変化の予測はできない。

廣田勇氏は、近頃世界的に異常気象、気候変動ということがいわれているが、気象学の現場はそれに対応していくための基礎理論すら整備されていない、という実情を指摘され、今後の研究の出発点について次のように話された。

気候とは、太陽からの熱エネルギーという外部要因に対する、大気、海洋、氷雪等の内部要因から成る気候系の応答におけるある平衡状態のことをいう。

気候変動とは、太陽からの熱エネルギーの変化に対する気候系の応答のことであるが、外部要因の変化に対する気候系の平衡状態はひとつではなく、複数存在する(多重平衡)。

大気物理学の立場から、現在の気候の姿とその変動の可能性を研究していくためには、「気候とは非線形システムにおける多重平衡解である」という新しい考え方をその出発点におく必要があるだろう。また、大林辰蔵氏は現代の地球上の人口爆発、食糧不足、エネルギー枯渇などの問題を解決する一つのオプションとしてのスペース

コロニーについて話された。今世紀に成し遂げられた科学技術をもつてすれば、スペースコロニー計画は十分に実現の可能性はある。計画遂行に伴う経費の問題も、いまの各国の防衛費を考えれば決して高くはないし、スペースコロニーを地球-太陽系のラグランジュ点(地球と太陽の間にある重力の力学的平衡点)に設置すれば、月の資源を活用し、太陽からは無尽蔵のエネルギーを調達できるだろう。

しかし、地球を飛び出し、宇宙空間に新天地を求めるといふ壮大な計画は果たして社会的な合意が得られるだろうか。いまや人類は科学技術の発展をもとに、宇宙空間に居住の場を拡大していくことを真剣に考えねばならない時にきている。

◇

最終日の全体集会で学生代表の総括レポートが各セクションごとに報告された後、次のような各指導教授からのコメントがあった。

「われわれの地球文明が将来どうあるべきか、という問題には既存のモデルはないのであるから自分たち自身で考えざるをえない。他の生命に対して人も人類は重責を負っているのであり、若いあなたがたの脳を十二分に使って地球文明の未来について考えてほしい」(櫻井氏)。「ひとつのことだけを見ていたのでは研究テーマを正しく選択できない。いろいろなことに興味をもち、いろいろな環境のなかで自分の能力を試してみたい。そういう経験のなかで自分の研究テーマを絞っていくってほしい」(福西氏)。「科学もある意味

では芸術と一脈通じるところがある。学問は職業を得るための手段ではない。科学すること自体が目的であるという態度もあってよいのではないか」(廣田氏)。「近頃はものごとをじっくり考えるということがなくなってきた。(考える)ということは人間だけに与えられた特権だ。身体的能力には限界があるが、人間の考える能力は無敵だ。この特権を有効に使おうではないか」(大林氏)。

現代の地球文明が抱える問題を太陽惑星間空間のなかで考えるという今回のセミナーのなかで、地球文明の未来は結局われわれ人類自身にあるという指導教授のコメントは印象に残った。運営方法など改善すべき点もあったが、これを契機に自然科学分野のセミナーも企画していける見通しが多かったことは大きな収穫であった。

生き方の指標を得て

東京大学理学部三年 中島 健介

掲示板の片隅の青いチラシを目にして、事務のおばさんからセミナーの申込書ももらった。あの頃は、本郷に来て半年、必修の実験も終わり、ただ講義に出るだけの毎日に、少々行き詰りを感じ始めていた。とにかく誰かと本気で話したかった。同じ自然科学を志す先輩・先輩たちと語り合い、できれば日頃わだかまっていたものをぶつけてみたい。

そんな当初の動機からすると、このセミナーは少々物足りなかったが、先生方の生の話に迫力があ

ったし、食事時間など、他の参加者とも「雑談」できたのは楽しかったが、真剣に何かぶつけあうべき「セッション演習」が一回だけで終わってしまったのはいかに歯がゆさが残った。

自然科学においても、やはり討論は成り立つし、必要だと思う。確かに自然「現象」はただ一つだけ起こる。その意味で、真実はひとつだが、このひとつの現象へのアプローチの方向は無数にあるし、そこから何を導くかは各人各様であり、それら全てが何がしかの「真実」を含んでいるのだから。同時に思うのは、この自然と本気で取り組もうとする時、自分が未だあまりに力不足ということ。勉強せねばならぬことはまだまだ多い。

それに、時は一九八三年——大林先生には問題山積、否、巨大な壁が待ち構えている。大袈裟に言えば、人類の未来はわれわれの世代にかかっている。次の世代に、安心して未来を託せるように、たとえ何十億の中のひとつとして、悔いの残らぬ生き方をしたい。

そのためには先ず、人間としての自分をしっかりと見つけ、精一杯伸ばしていくことが第一だろう。残る一年強の大学生活、そして卒業後、自分がどんな道を歩むのかはさだかではないが、それでも、また機会があったら、たとえ文科系のテーマでも、セミナーに参加したいと思う。何と云っても、人と話すのは本当にスリリングで、楽しいことなのだ。この発見が、楽しくがセミナーで得た最大の収穫であった。

●寄贈図書—その一—

57年6~8月

- 「大学研究ノート」53
- 「東京女子大学教育研究センター」
- 「農民層分解の現局面」
- 「法政大学五味研究室」
- 「国際交流」31、「イスラーム文明と日本文明」 国際交流基金
- 「工学院大学研究報告」52
- 「工学院大学図書館」
- 「英米文学評論」28
- 「東京女子大学文理学部」
- 「神奈川大学五十年小史」
- 「大学時報」164~166
- 「Changing Agriculture and Rural Development」石井素介
- 「現代詩研究」 現代詩研究所
- 「会報」96 国立大学協会
- 「岩波理科学辞典」 江沢 洋
- 「Daily Herald Library Collection」他二冊
- 「82マネジメント年報」経営思想変遷史」 産業能率大学
- 「アジアの友」4・5月号
- 「早稲田法学」第57巻1・2号、他三冊
- 「早稲田大学法学部」
- 「早稲田フォーラム」
- 「社会学論叢」84 笠原正成
- 「金融経済」194 金融経済研究所
- 「立教」102 立教大学広報課
- 「AJALT」5
- 「国際日本語普及協会」XIV
- 「Asian Book Development」No.1
- 「ユネスコ・アジア文化センター」

法人ニュース

専務理事に

吉川孔敏氏が就任

前号で既報のとおり、第52回理事會・第33回評議員會にて、岡山猛氏の後任として吉川孔敏氏が専務理事に推挙され、本年1月1日付で就任した。



ご挨拶 吉川 孔敏

この度はからずも大学セミナー・ハウスの専務理事として就任いたしました。もとより、浅学菲才の身、その重責に堪えられるかどうか自信はありませんが、中川理事長のご指導の下に、大学セミナー・ハウス発展のために、微力を傾注したいと存じます。

喜一郎・大浜信泉・茅誠司先生はじめ歴代の理事・評議員の諸先生および飯田宗一郎名誉館長の血のじむご努力の結晶として、今日に至った経緯を肝に銘じ、今後は、理事・評議員の先生方は勿論

のこと、各種委員会ならびに千人会会員の方々の倍旧のご協力をお願いして、職務に励みたいと存じます。

職員各位におかれても、私のモットーであります「和・協力・努力」を中軸として、明るい職場づくりと利用者各位へのサービスの向上のために団結して頂くよう、心からご協力をお願いしてご挨拶いたします。

昭和57年度 第2回国際 プログラム委員 会

昭和57年12月10日/学士会館

昭和57年度第2回の委員会が、別記の出席を得て開催された。中川館長の開会挨拶のあと、さっそく議事に入った。

まず第9回国際学生セミナー「発展と平和のモデルを求めて」日本再考(昭和57年10月29日31日)の実施報告が横田運営委員長から行なわれた。二七大学九二名(内留学生一五名)の参加を得て成功裡に開催できた。今回は募集チラシの表紙に英文の主旨文を入れたり、英文の応募要項を付けるなど工夫してみた。まだ評価は下せない段階であり、委員各位の意見を聞きたい。また、企画室からは留学生の募集には依然として困難を感じており、とりわけアジア地域の留学生の参加が少なかつた点を反省し、今後の課題としていきたい、という補足説明があった。続いてセミナーの使用言語をめぐって議論されたが、結論には至らず今後の課題とされた。

次にセミナー「報告書」の進行状況の報告が企画室から行なわれ

千人会

昭和57年12月~58年1月

現在会員は、六六九名です

大学人II 一、二五一名 社会人II 四一八名

新しく会員となられた方々 一名(第67回報告(申込順))

C 恵泉女学園短期大学職員 高橋 正殿

- 江副敏生、外池孝雄、藤林宏一、太幡祐己、田村光三、下川浩一、今堀和友、岡本敏雄、竹内啓一、西巻正郎、内藤正、大谷慎之介、茂木誠陸、高野雄一、森繁雄、手塚富雄、城謙輔、新井益太郎、村井賢長、尾田幸雄、宮川透、宮本勉、鬼塚宏太郎、中野卓、有山正孝、来住正三、大内英吾、清水誠、森岡敬一郎、角尾稔、三浦安子、茅伊登子、石田孝夫、高橋浩爾、吉永フミ、池田温、築地整、杉山好、宮川松男、濱川祥枝、和田木松太郎、小西正捷、近藤圭一、横塩健雄、山口高康、水野悦子、大塩俊介、三井友友、大須賀節雄、徳座晃子、江野沢一嘉、柳下綱道、沢孝一郎、須田精二郎、木村敏美、西田亀久夫、平島正喜、遠藤健治郎、徳久球雄、佐々木邦彦、岩尾

- 企画していく必要があると思われるので、本年度もできれば3月に開催したい。委員長の発言を受けて、外国人研究者数名がゲスト。スピーカーの候補にのぼった。菊地・広野両委員が運営委員に選出され、年度内の実現を目指し企画を進めることになった。 (出席者) 中嶋嶺雄、広野良吉、三輪公忠、横田洋三、金山宣夫、菊地靖、山沢逸平 (敬称略)
- 裕純、石井不二雄、清水護、佐藤豪、岡崎正、浮田久子、杉山吉茂、天野成光、久場博子、清水啓三郎、山鹿誠次、加藤利勝、川端香男里、高橋恒郎、高橋正、伊藤学、川鍋正敏、大口勇次郎、森田明、慶伊次郎、瀬川茂、塚本利明、矢澤修次郎、飯田芳男、桑原哲郎、中尾由矩子、中尾信之、上田明子、福原満洲雄、古賀正則、伊藤文人、斉藤文雄、大羽滋、青柳総太郎、武田昌輔、平松幸一、佐藤進、石山伍夫、大橋万知江、斉藤耕二、田村恭、池田貞雄、竹中肇、森山俊雄、後藤聰一、半谷高久、竹林代嘉、師岡孝次、鈴木皇、三戸公三、三浦永光、古田勝久、大川信明、川崎正三、瀬野信子、小林哲也、安味貞正、石橋秀雄、松澤正夫、武藤義夫、上山碩、東川清一、白井泰四郎、刈田元司、渡辺忠胤、石井素介、森田豊夫、鈴木博、深沢実、青井和夫、中富光国、鐘ヶ江信光、若林貞雄、新井明、高橋源次、石塚可農夫、一番ヶ瀬康子、伊藤洋、打田峻一、園田義道、相原光、石井明、慶谷寿信、茅野良男、河田敬義、柳父園近、猪瀬博、

- 平木典子、浦上要三、関正彦、池井優、根岸愛子、秋山虔、光延明洋、小林甫、川喜田愛郎、松原元一、北原文雄、松元三郎、磯野修、大森東亜、小川弘志、乾崇夫、箱木真澄、富沢賢治、加倉井茂樹、小川洋輔、澤本孝久、松山正男、篠崎武、高村新一、田中英夫、遠藤一郎、高橋昭三、柳沢富雄、中山知雄、谷口修、藤巻正生、山田辰雄、上谷琢之、若山邦敏、小林清子、平川紀一、吉田裕、内山正熊、小川政亮、中利太郎、米川哲夫、原増司 (敬称略)

寄付金報告

57年10月~58年1月

- 教育プログラム資金 一、〇〇〇円 第9回国際学生セミナー 一参加学生一同殿 二、〇〇〇円 第9回国際学生セミナー 一参加学生一同殿 三、〇〇〇円 第9回国際学生セミナー 一参加学生一同殿 一 社会人参加者一同殿 一六、〇〇〇円 第5回大学合同セミナー 一参加学生一同殿 一 参加学生一同殿 五、八〇〇円 第11回大学共同セミナー 一参加学生一同殿 一 参加学生一同殿 一〇、〇〇〇円 上智大学教授 高野雄一殿 一〇、〇〇〇円 順天堂大学 P3クラブ ス・セミナー参加者一同殿 六、〇〇〇円
- 植樹資金 慶応義塾大学小池ゼミ殿 六、〇〇〇円
- 現物寄付 花瓶・灰皿 小泉産業株式会社 灰皿 パキスタン・カラチ電力 技術者研修生一同殿

●事業部だより

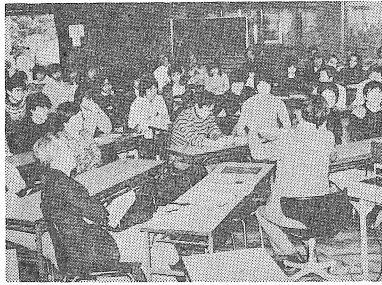
57年12月・58年1月
年末・年始のキャンパスから

●12・1両月の概況

例年12月は、冬休み開始の前夜を選んだ各大学の合宿で賑わう。今年も計一〇三のグループを迎えた。宿泊者は延べ二、六二五人、うち会員校の占める比率は七八％に達した。卒論・修論の中間発表と討論を目的とする合宿が多い。一方1月は、学年末試験をひかえ、これも例年同様大学のゼミの利用は極端に減少。グループ数は四八、宿泊延人員は一、八六〇人を割った。

●年末と正月の合宿から

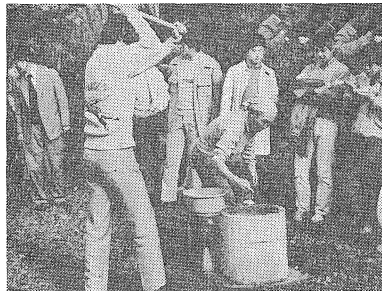
幸せなことに、毎年「年越し」を前に、ハウスはこの季節の常連をお迎えすることができる。おな



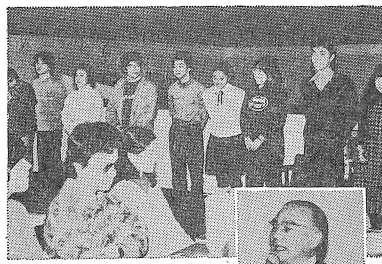
① 順天堂大P3クラス・セミナー——ゲスト講演を聞く医学部新3年生たち（講演）



② 恩師・西宮教授を偲ぶ早大・横浜商大合同ゼミ。お茶の会で友情のエールを交換(交友館)



③ 歳末恒例の餅つき風景——来泊者とハウス職員が交互に杵をとる（遠来荘）



④ 〔成人の日〕交歓会——師岡東海大教授（右）から祝福される「新成人たち」（食堂）

じみの先生方のお名前は別掲「利用状況」でご覧いただくとおりである。上智大・高野雄一教授は、今年も12月はじめに学部と大学院二つの国際法ゼミの集中演習で三泊された。慶大・小池生夫教授を中心とする異色の「留学生との交流合宿」（別掲記事参照）も恒例の行事。また、早大グループがこの月の中盤に集中するのも、毎年の現象となっている。今年「四割納め」の28日まで滞在されたグループのうち、杉野女子大・田村純司教授の「教育原理ゼミ」は一年目、文学教育研究者集団も一年目という常連グループである。なお、年末最大の集会は恵泉女学園短大英文学科の総合講座「国際一合同セミナー」（七三名）。

昨年、準会員校となった同短大がハウスで初めて試み、成功をみた集中演習の再現である。一九八三年の初利用は、「仕事始め」の5日に入館された経済地理学研究会の九名。次いで翌6日から二泊の準会員校・産業能率短大恒例のリーダーズ・トレーニング・キャンプ（五六名）など四グ

ループ。第二週には東京神学大の「教職セミナー」で全国各地から就職者、院生、同大スタッフなど計一三二名を迎えた。ハウスの開催連続一四年目という新春恒例の行事である。同月最後の週に実施された順天堂大P3クラス・セミナー（九三名）は、医学部専門課程に進学する新3年生へのオリエンテーションを兼ねた合宿研修。学生部長の浅見一羊教授を中心に昨年初めて試みられて好評、今年も再び厳寒のこの時期に開催されたものである写真①。

●恩師を偲ぶ合同ゼミ

12月中旬、早大西宮ゼミと横浜商大平野ゼミが合同の合宿を行なった。早大・西宮輝明教授（千人会員）は前月末に急逝。突然師を亡くした西宮ゼミの学生二〇名は、しかしその悲しみを越えて予定どおり二泊の合宿を実施することを決めた。これを聞いた横浜商大の平野文彦助教授と学生一三名が、急ぎよ西宮ゼミを激励する合同の合宿を計画、両者がこの丘で合流することになった。平野助教

授（同じく千人会員）は故西宮教授のお弟子の一人。早大大学院当時、西宮先生のアシスタントとして初めてこの年の合宿を体験、以後横浜商大の教師としてハウスの常連となった方である。両グループ来泊中交友館に設けられた「西宮先生を偲ぶお茶の集い」では、最後に双方が校歌とエールを交換し、友情を分かち、「ハウスを愛した亡き恩師の心を継いで今後もここでこの合宿を続けること」を確め合った写真②。師弟間と大学間の交り——タテ・ヨコの人間交流が織りなす美しい情景であった。

●留学生との交流合宿

本号の「わたしたちの合宿」紹介欄では、外国人留学生と日本人学生との交流を目的とする慶大小池セミナーに登場をお願いし、毎年夏の大学英語教育学会等でご縁の深い千人会員の小池生夫教授に別掲の一文をお寄せいただいた。生活交流の中に教育の場を求め、内外の学生たちをよく自宅に招かれるという小池教授。今年も12月

第一週末、夜の大学院セミナー館では同教授を中心に、国籍を異にする若者たちが文字通り「一つ家族」のように交流し、親睦を深めた。日本人参加学生の中には、日米学生会議などでも度々来泊、ハウスとの関係を深めた経済学部4年・吉田直人君（今春卒業・現在新日鉄勤務）がいる。新春の「第2回日米学生論文コンクール」（日米文化センター主催）で同君の書いた「軍事技術交流は日米協力のプロトタイプたり得るか」が最優秀に入賞した。同君のように同合宿を体験した内外の学生の中には、真の国際性を身につけて各分野で活躍し、また活躍しようとしている若者が多いことを付記したい。

●暮と正月の交流プログラム

以下、12・1両月に行なわれた恒例の交歓行事を拾って、その模様を点描してみたい。12月18日夕食時に在泊の一〇グループ計二〇〇名が、クリスマスにちなんで交歓。中川館長の親火から灯された食卓のロウソクの明りの中で、地元の有志がピアノを演奏。第120回共同セミナーの大林辰蔵・宇宙科学研究所教授が同セミナーの主題（地球）に関する卓話をされた。在泊グループからのアトラクションのあと、最後に全員で「もみの木」などを合唱。12月27日昼食時をはさんで恒例の餅つき大会が民家・遠来荘で行なわれ、六グループ一〇〇名がつき立ての餅を味い、屋外で交歓。暖かな日和に恵まれ、在泊の先生や学生もハウス職員とともに杵をとった写真③。なお、近隣

を前に、ハウスはこの季節の常連をお迎えすることができる。おな

